

2008年12月11日

## フランスにいて浮世絵がわかるか、日本にいて日本株がわかるか(前編)

**フランスの絵画の歴史に日本の浮世絵が与えた大きな影響は良く知られています。**

どうして浮世絵がフランスに渡ったかという点、陶器の輸出の際に包装紙として使われたからだと思います。当時の日本では、浮世絵は大量生産されていて、包装紙に再利用するくらい、ありふれたものだったのでしょう。ところが、フランスでは、希少な・新鮮な美的刺激に富むものとして、珍重されたということです。

**現在の世界の美術界における浮世絵の地位は、外国人が浮世絵を見出したことによって確立したのです。**

もちろん、浮世絵を作ったのは日本人です。しかし、浮世絵の価値を作り出したのは、浮世絵を作った日本人ではなく、浮世絵を見出した外国人だったのです。昔の日本人が浮世絵につけた価格は、同時代のフランス人がつけた価格とは、比較にならないくらい安かったと思われます。しかし、現在では、フランス人であろうが、日本人であろうが、何人であろうが、同じ一つの浮世絵については、同じ価格で取引せざるを得ません。もはや、美術品市場は、グローバルに統合されているからです。長期にわたって、二つの価格が、一つの価格に収斂してきたのです。その間に、価格の低かった日本から価格の高かった海外へ、大量に浮世絵が流出したのは、理の当然です。それが、交易(貿易)の本質です。この浮世絵の交易に携わった業者が、それなりの利潤を挙げたであろうことは間違いありません。ただし、利潤のほとんど全ては、浮世絵を売った側ではなく、買った側の業者にあったのではないのでしょうか。

世界中のナマコを探し続けた中国人、胡椒を求めて世界の海に乗り出した欧州人、その他世界中の人々が、それぞれの立場で、自国の中にもない価値を探し続けたことから、国際交易が活発化し、現在のグローバル経済が創出されてきたのです。ナマコも胡椒も、生産地では、たいした価値はなかったのです。価値は、外から来て価値を見出した外国人が生み出したのです。だから、浮世絵の場合と同様に、ナマコや胡椒の交易利潤は、その価値を見出した業者にあったはずですが。

**要は、現在のグローバル経済体制の視点から見ると、日本にいては浮世絵の価値がわからず、南洋の島にいてはナマコの価値がわからず、アジアにいては胡椒の価値がわからなかった、ということになるのです。**

だから、利潤も価値を見出した側にあつて、生産者の側にはなかったのです。現在につながる投資というのは、このような交易事業に対する投資として始まったのではないかと思います。交易業者は、自己資金だけでは買付代金や用船費をまかなえず、外部資金を必要としたらうからです。交易利潤は、業者にまわる以上に、資金を提供した投資家に投資利潤として還元されたのでしょう。

**冒頭の問いに戻りましょう。「フランスにいて浮世絵がわかるか。」**

答えは、日本にいては浮世絵がわからず、むしろフランスにいなければ浮世絵はわからない、ということです。だから、投資の視点から見る限り、浮世絵ビジネスへ投資するならば、フランスの業者に投資しろ、ということになるのではないのでしょうか。では、次の問い「日本にいて日本株がわかるか。」ですが、答えは、来週の続きをご覧ください！

続きは、12/18(木)となります。よろしくお願い致します。